

松屋反故集

七

15  
1406  
7



卷之五  
目錄

門 45  
號 1406  
卷 7

みずぬの

多き人のあらしもさげん

からしよぬみこころい

あまのこころいさく あまのこころいさく

様もとり物もさる あまのこころいさく

あまのこころいさく あまのこころいさく

あまのこころいさく あまのこころいさく

あまのこころいさく

あまのこころいさく

昭和四年二月廿一日  
高田早苗氏贈



ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふんふんふんふん

ふんふんふん

ふんふん

ふん

おとせをうらまへてたゞ勝をば  
好むをくし格を似れをも  
燕をに姑を似て其あせいよひりや  
婿の格を似てしやうをば  
とておれ

男子音曲と云はるは宗業をば  
婦人の初よむるもあはれ  
何れの格のちかみ  
お供のちかみ

年々おなほいづうあはれ  
もく

あをいづうあはれ  
いづう

仔細に  
仔細に

おとせをうらまへてたゞ勝をば  
好むをくし格を似れをも  
燕をに姑を似て其あせいよひりや  
婿の格を似てしやうをば  
とておれ

大正

高

延 頌 一 十 九 三

若かり茶工服してはるるもやあらぬ  
おまほの跡との物あらはるる  
えんりうを祝ぎくの世あらぬ  
存候も又しるす

ひつりやうのあつとせう  
おせんみずのえぬのへん  
ののいさげのいさげ  
いせんかかいらいりうまやめくれ  
ちん日はあまきつるあまき  
おののあまきつるあまき  
いりののあまきつるあまき  
いりののあまきつるあまき  
○中ごん  
いり目とゆりやうの人と花  
入るあまきつるあまき  
ののいさげのいさげ  
あまきつるあまき  
いり目とゆりやうの人と花

延 頌 一 十 九 三

三九里加年十二延三

いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに  
いづれにみづの之のいづれに

○中さ

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

六六 日三 分曆 日三 六六 日三 分曆

○善の... 二行アリ

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに

いづれにみづの之のいづれに







頒曆

延壽陰陽曆式律一凡道符者三頒曆  
 一百六十六卷納漆櫃一若皇土月百至  
 延政門外中言東宮御三頒曆一百六  
 十六卷和紙二千六百廿六張卷別同十  
 加二張別禊紙和紙廿六張又一枚三  
 寫十二延年頒曆并草料以一延良毛筆  
 九十八管已上紙筆墨糊和 大豆三升  
 三合誦大檜軸一百六十六枚誦木

歌学大成

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十

Handwritten notes in cursive script, including a large vertical column of text on the right side of the page and smaller annotations within the main text area.

寫頒曆手卅一人 諸司文生廿三人內監四人  
大官人四人並不在內  
 限之 限之 納頒曆者漆韓樵一人 長二人三寸  
無一尺二寸  
厚一尺三寸五分  
墨漆管形加粗 凡曆本一進曆手頒  
 曆六月廿一日為期限云

中星曆

延喜陰陽式擇子凡中星曆者八十  
 二年一度造進其用年者得工臨事  
 勳錄進奉即申者請亮

七曜曆

晉書天文志上天文恒星の字子張衡云文曜  
麗乎天其動者有七日月五星是也日者  
陽精之宗月者陰精之宗五星其行之精  
云々

同天文志中七曜の字子日為太陽之精主生  
養恩德人居之象也月為太陰之精  
以之配日女主之象以之比德刑罰之我  
引之朝廷諸侯大臣之類云々歲星曰東

方春木於人土帝仁也土事貌也  
或曰南方夏火祀也視也  
填星曰中央季夏土信也思心也  
太白曰西方秋金義也言也  
辰星曰北方冬水智也  
聽也云云

延喜陰陽式行七曜御曆正月一日  
便承明門外便想云又云凡造曆用  
度者御曆三卷二卷具注一卷七曜神上紙一百  
廿張請備書卷云七張麻紙四張請內藏

上皇大牛延請備書卷上朱沙三兩請藏人所  
兔毛筆十二管請備書卷膠一兩請藏人所  
軸三枚請備書卷白絹三條請備書卷  
曆本三卷請備書卷御曆十二日請備書卷  
本進奉云七請備書卷御曆十二日請備書卷  
御曆云

小學御珠卷一天通款子七政又曰七曜日月  
書云御珠在璿璣玉衡以爲七政七者運行於  
後漢曆六日月七緯各有統序而七元生焉史記律書  
云七正

知不足

齊丘子治民家篇云  
 觀食象者食牛  
 不足之視或見者食  
 冠不足不足  
 有所自不屏有所始是知王好者  
 則臣不足臣好者則士不足士好者  
 則民不足民好者則天下不足夫  
 天下之物十之五好一民亦一王好也民亦  
 其五好十民亦十以十論之則是十  
 家為一家十國為一國十天下為一



大坂軍 大向としるのせいのせいのせんかん

少やがりのか

おきるー大坂軍のひいごころ押して

福の門

大坂軍はんせんやいよほのせいちりて

産をちりて

さいまふいひるやいのせいちりて

ておるやいよほのせいちりて

あつちやがり

さいはりのせいちりて

きよみちりて

さいちりて

さいちりて

ら始

さいちりて

あつちやがり

大坂軍

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん

せんかん









とらぬはらふらぬのみ

あやあやのりかひはなごうのうらぶーあはれ

きりいんちんちんちんちん

やむらひのりかひはなごうのうらぶーあはれ

りよとらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

りよとらぬのみ

りよとらぬのみ

りよとらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

とらぬはらふらぬのみ

長門抄



之狂歌通計五十九首中。中歌、歌、茅

十八陰陽乃德字失三十一  
時波土行同久三十一之同第十九歌  
破歌也而今現存者實五十四首也。

論のほいをあらわすらんや  
上のをいへり

きりかくとふ廿八首の一星をさるなりと  
用するなり

わらわやいふ事づより  
明やいふ事づより

あゝありありあらむ

あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを

あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを

あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを

あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを  
あゝいふもあはれを

あゝいふもあはれを



漫評鷹百首序

かゝるいよにせし。やまをわきよめりてそのこ  
けさといふんをこころにわきよめりて  
まゝに。この世さうの事なり。いん。試  
まひらけらるをいふ。かゝるいよ。急就  
章。千字文。單訣百韻。雪心賦。蒙求。  
やまをわきよめ。馬毛歌合。西明寺百首。中  
明寺百首。珠明寺百首。馬方百首。  
蹴鞠百首。犬追物百首。知術百首。射

快書大略

快書大略







唐犬額

元正河記の考 法徳の 杖を居下  
 谷金杖子居り。前年是向け御。  
 旗の大きき杖ゆゑと云人のを  
 あを居る御の御の唐犬二匹。杖を居る  
 けいかけし。左右より飛りける有る也。  
 踊り乞二匹の犬も蹴倒し。鼻下  
 と狐と。二匹の犬も蹴り。鼻下  
 御。二匹の犬も蹴り。鼻下

Blank page with vertical lines.

いふ事なり。さうさう。雲火といふは  
只王とくく。都をたきよむ事あり。  
川流ある。男女之。此年死者の者あり。  
檀立の都をたね。雲火都とは  
代をたね。此記といふ。

御幸元正河記同卷写本一し元禄  
より正徳の間の事なり。記し  
御幸本詳

付録

台記天保二年十二月三日。今日御幸  
行幸一昨日。攝政赤鳥羽奏請。延引  
行幸。執回。莫延。僕聞。行幸。向御總  
角。付後。於路。を故。落。失。了。事。不  
祥之象。歟。後日。頭中。の。鑑。云。件。付。後  
臣。敷。日。宣。殿。上。御。倚。子。也。暴。紙。置。之  
不知。何。人。所。為。也。

玉海文心書年十月花のあま。此日當存

初度者日行也  
孝仁御總角  
次召  
詎家卿念  
髮剛長也

總角

台記天卷二年正月四日

史學大綱

垂髪

明治二年三月三日のまゝ今

丸高浦丸亭の末重髪始重髪三歳

宝石才ハのまゝ

封戶考證

漢書貨殖傳九十二卷子孝漢之制列侯

封君食租稅歲率戶二石千戶之君

則二十萬朝覲聘享出其中庶民

農工商賈率年歲萬息二千六百萬

之家即二十萬而更歸租賦出其中一

按子孝封戶千戶詳後之君租稅廿萬

石此則朝覲聘享之勤入月

及獻上其外之雜費也此中云出以

民の富る者万束の積りて二千の利積  
をたつし百万束とたつ家を七万  
束の作得あり

具注曆

延壽陸陽曆式 行子凡進曆者具注

御曆二卷 六册以前考上下考初 陸陽女流

寺 之 一 寺 一日延政門外 中宮

御曆此 凡造曆用度者御曆三卷 二

具料上紙一而七張 請編書曆早七張 麻

紙四張 紙料請 上墨大半 請圖上

朱砂三兩 請藏 兎毛筆 十二管 請

膠一兩 請大 花軸三枚 請本 白絲 別

女學大藏



一尺六寸所之曆本 三卷押紙九十張  
請内侍所之曆本 三卷押紙九十張  
七張押紙之凡曆本 道心等具臣等曆  
送本押紙之凡曆本 道心等具臣等曆  
八月一日為期限

師臣

師臣は王者の至密見し<sup>同</sup>の大公存  
の管仲 蜀漢の諸葛亮の教  
出たり 唐書馬懷素の傳に玄宗  
詔して 祿を厚く 同く 侍講と  
更<sup>カ</sup>日<sup>ニ</sup>番<sup>ト</sup>入<sup>リ</sup> 既<sup>ニ</sup>子<sup>ノ</sup> 監<sup>ト</sup>を<sup>ト</sup> 振<sup>テ</sup> 師  
學<sup>ニ</sup>を<sup>ト</sup> 以<sup>テ</sup> 進<sup>ム</sup> 或<sup>ハ</sup> 行<sup>ヒ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 在<sup>ル</sup>  
さば 馬<sup>ノ</sup> 子<sup>ノ</sup> 刺<sup>シ</sup> 宮<sup>中</sup> 子<sup>ノ</sup> 入<sup>リ</sup> 可<sup>ク</sup> 聽<sup>ク</sup>  
寧<sup>ニ</sup> 見<sup>ル</sup> 帝<sup>ノ</sup> 自<sup>ラ</sup> 送<sup>リ</sup> 迎<sup>フ</sup> 師<sup>臣</sup> 之<sup>ヲ</sup>

礼を以てとありし即座の字面也  
ハ

○三代實錄廿四丁元慶二七十一の字に出羽國

飛取考云曰 上野抄飲使權

大務南河秋卿等來上野國之到兵

六百余屯秋河南拒城於河北

抄天塚云抄飲使を首あり

○ 授采略記廿二丁宇多天皇元慶辛丑年

九月廿日の事と對馬島司言新羅城從

船甲十艘到島之日 即島分

舟上屋借面均上野御副大領下等主為

押飲使百人軍名結廿番遣絶城移家  
宝道

林國分守の上屋信と御の副大飲と  
軍の押飲使と

○ 朝野載廿二卷 丁未 天務正午六月廿二日  
駿河国司申請官裁状

○ 同卷 丁未 天務正午 二月廿日下徳守屋  
原朝臣行 押飲使并統隨兵卅人状

右籠換書の當国司等帶押飲使  
并給隨兵

○ 同卷 丁未 淡路国司申請官裁状

○ 同卷 丁未 神前国司申請官裁状

勘取長等官所七卷押飲使の事

三年三月九日大政官裁

西宮記臨時部一カ 諸官裁の事

國遣捕使畿内、或考勅使所、國以、國  
解、東宮、賜、官、給、抄、使、同、之、三、

按、目、の、遣、捕、使、と、抄、使、の、別、

北、山、所、之、老、曰、詔、國、申、宣、抄、使、了、

陸、奥、詔、記、ナ、リ、定、詔、陣、抄、使、

按、陣、抄、使、の、軍、の、大、お、し、軍、考、

行、と、云、し、う、如、の、後、三、事、記、と、陣、

後、三、年、記、上、行、と、言、お、新、任、を、改、

一、時、武、則、一、家、と、さ、る、し、る、あ、り、辨、

も、り、と、柔、原、部、一、、管、の、國、と、さ、詔、

陣、の、抄、使、と、定、て、軍、を、と、の、一、時、

こ、の、考、武、則、三、陣、の、以、り、定、を、り、一、、

信、濃、垣、和、部、辨、、存、在、中、年、并、天、由、未、

詔、と、宣、正、文、明、の、此、を、一、、國、即、郷、村、子、

大、中、少、の、抄、使、を、て、政、を、と、失、ひ、を、

及、う、し、と、邪、欲、盜、賊、を、も、り、是、こ、と、ん、

の、後、

按察心文明の比有り天下の亂に乗じて  
押欲使自之——大中小の品ありて  
威勢を逞せりところ

○ 伊予守長良記世に於て上秀郷後日位下  
二叙言武蔵下野西国ノ押欲使ヲ給  
ハリシ

按秀郷西国の忠大おともありし  
おつを延侍せし

○ 同廿六 行 出雲國 福田押欲使

延元と云ふ

○ 同廿九 行 美作國 久米南修 福田在久  
也、又ハ押欲使深氏、母ハ孝氏ナリ

○ 若菜鏡六 行 上総後國 在國司 押欲  
使兩職 不有 相違 之由 依天氣乳執

在國司 在國  
久、身野大夫永平 在國

司ハ押欲使ニ兼職セリ

○ 同七 行 入北守 田次 村上 孫津 國為 平  
家 進 討 跡 在 古 塔 筆 之 惣 諸 國 在

廳在園下司惣押飲使可為所進退之  
由祿下宣旨事又教使飲主雖為權門於  
在公下司兼國在廳前向可為所進退  
候也建就右衛官人被召國中庄公  
下司押飲使之任人可社之能内裏  
守護以下同味乃役之

○又廿六 秀衛法師出羽押飲使是衛

○同廿九 雅上澄奥押飲使是平氣臣

秀衛 文治三年十月延文是

路為出羽澄奥押飲使是管飲六郎

○傳宣平下世子

○田老左師西河河一行

○德外平一十七段 德平三ノ下力

○新野同者一廿三丁

○官制法事一廿丁

○首所法事二ノ下力

○定石數五十三



0

0

又雅記也  
Handwritten musical notation on a staff.

0

Handwritten musical notation on a staff, including the word "Lullaby" written vertically.

Handwritten musical notation on a staff, including the name "E. de J. v. d. A." written vertically.

高

○笙 籥乃布江

假笙 皇和

匏

答笙 陪笙。風管。簧 匏

大魁 竿 大竿 小竿

傳名類聚抄 卷四 管籥類部 子笙釋名

云笙 音生 俗云 籥乃布江 竹之母曰匏 音交 反 俗云 匏保

以匏為之橫施於管頭曰簧 音黃 俗云 之太

以竹 缺作之 今案有 十七管

同書天文本 卷四 音樂具部 子笙釋名

云笙 音生 俗云 籥乃不江 竹之母曰匏 音交 切 俗云 都保

快書快藏



以<sup>テ</sup>甄<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>筭<sup>ル</sup>亦是也<sup>也</sup>  
音其中<sup>ニ</sup>受<sup>ク</sup>  
也  
筭<sup>音</sup>黃<sup>太</sup>  
於<sup>テ</sup>管<sup>ノ</sup>頭<sup>ニ</sup>橫<sup>ニ</sup>施<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>

教訓抄卷<sup>ハ</sup>管<sup>ノ</sup>類<sup>ノ</sup>部<sup>ニ</sup>子<sup>ノ</sup>管<sup>ノ</sup>筭<sup>ノ</sup>  
形<sup>ハ</sup>寫<sup>ス</sup>鸞<sup>ノ</sup>翼<sup>ノ</sup>

隋<sup>ノ</sup>筭<sup>ノ</sup>  
隋<sup>ノ</sup>代<sup>ノ</sup>始<sup>メ</sup>故<sup>ニ</sup>  
釋<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>云<sup>ク</sup>  
音<sup>ハ</sup>生<sup>ク</sup>俗<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>竹

之<sup>ノ</sup>母<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>甄<sup>ル</sup>  
得<sup>ル</sup>交<sup>ハ</sup>反<sup>シ</sup>俗<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>豆

混<sup>ル</sup>天<sup>ノ</sup>氣<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>筭<sup>ル</sup>者<sup>ハ</sup>女<sup>ノ</sup>媧<sup>ノ</sup>氏<sup>ノ</sup>所<sup>レ</sup>作<sup>ル</sup>也<sup>也</sup>  
十九

圓<sup>ノ</sup>濱<sup>ニ</sup>立<sup>テ</sup>鳴<sup>ク</sup>聲<sup>ノ</sup>種<sup>ノ</sup>也<sup>也</sup>  
女<sup>ノ</sup>媧<sup>ノ</sup>聽<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>切<sup>ル</sup>

解<sup>ル</sup>谷<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>行<sup>ク</sup>作<sup>ル</sup>筭<sup>ル</sup>仍<sup>テ</sup>稱<sup>ク</sup>筭<sup>ル</sup>名<sup>ノ</sup>鳳<sup>ノ</sup>管<sup>ノ</sup>

也

以<sup>テ</sup>甄<sup>ク</sup>為<sup>ス</sup>之<sup>ヲ</sup>筭<sup>ル</sup>亦是也<sup>也</sup>  
音<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>中

筭<sup>音</sup>黃<sup>太</sup>  
於<sup>テ</sup>管<sup>ノ</sup>頭<sup>ニ</sup>橫<sup>ニ</sup>施<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>其<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>也

引<sup>ル</sup>仙<sup>ノ</sup>傳<sup>ノ</sup>曰<sup>ク</sup>王<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>喬<sup>ノ</sup>作<sup>ル</sup>筭<sup>ル</sup>歌<sup>ク</sup>

體<sup>ノ</sup>源<sup>ノ</sup>抄<sup>ノ</sup>卷<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>方<sup>ノ</sup>一<sup>ノ</sup>小<sup>ノ</sup>審<sup>ノ</sup>ハ<sup>テ</sup>子<sup>ノ</sup>條<sup>ノ</sup>ノ<sup>ニ</sup>思<sup>フ</sup>也<sup>也</sup>  
子

去<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>載<sup>ル</sup>之<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>筭<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>同<sup>ナ</sup>也<sup>也</sup>  
一

先<sup>レ</sup>非<sup>レ</sup>道<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>筭<sup>ル</sup>ハ<sup>テ</sup>子<sup>ノ</sup>家<sup>ノ</sup>也<sup>也</sup>  
可

問<sup>ク</sup>如<sup>ク</sup>何<sup>ノ</sup>云<sup>ク</sup>哉<sup>カ</sup>鳳<sup>ノ</sup>凰<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>言<sup>ト</sup>云<sup>ク</sup>一<sup>ノ</sup>也<sup>也</sup>

於子孫の極秘も可傳

也 一流終る何之  
仍亦真の文

釋名曰笙生也象物貫地而生以  
氣為之其中空以受箏也

按劉熙の釋名七の卷釋樂器

部之之文實同あり

白虎通曰笙之言施也芽也万物始  
施而芽大族之氣也

按班固の白虎通德論一の卷禮

樂篇の文を取捨し引よし白

虎通の言施也在十二月萬

物始施而榮笙者大族之氣象

萬物之生故曰笙有七政之節焉

有六合之和焉天下樂之故謂之

笙と云

説文曰笙正月之音物生故謂之笙

有十三簧象鳳之身

世本曰隨作笙禮記曰女媧之笙

箏

耶鄂也。經折疑曰夫箏者法萬物始  
生導達陰陽之氣故有長短黃  
鐘之始象法鳳凰

又白虎通曰箏有七政之節焉有  
六合之和焉天下樂之故謂之箏

晉夏侯湛箏賦曰嗟萬物之殊觀

莫比美乎音聲一物衆異以合體

匪求一而取成雖琴瑟之既嬰猶

靡尚於清箏

**按**此箏賦之辭藝文類聚四十

四卷笙部之載之萬物也方物也

此求一而取成也求一以正也

古之善吹笙者王子晉 見列子

董双成 見漢武內傳 漢桓帝 見漢書

魏杜夔 見魏志 已上

抑笙之箏也此字同吹物也

心尤深也。可秘之。六調子所之志可有  
心通用母八可

安

望後我朝再差始事大同四年三月

廿二日格云

答望四人云

國史云文武天皇大寶二年正月癸未宴群臣於西閣奏上常太平樂

按續日本紀二の卷十一  
丁右云云

聖武天皇天平七年正月庚申天皇

御北松林奏唐并新羅樂

按續日本紀十二の卷二丁  
左云云

皇御北松林覽騎射入唐回使及

唐人奏唐國新羅樂拵搖上位

已上賜祿有差とあり

今幸唐国曾有笙

不可疑事欤

古来以笙得名非事 古老傳云天

曆即時

自<sup>賜</sup>橘皮笙

予高而意賜之

康保二年正月

有秋令吹笙

我朝

昭宣公

帝王

親王

笛通

武家

正上私北擇古記載之

同書卷四 管笙之度方子又名鳳管又

名隋笙形寫管翼笙所度切云

又云大等小等何モ圖

4

舌之類皆非吉祥言

應也

塵洛壺表抄卷四 大魁 事付字子笙竹立

所二十七竹根鑿入心穴アリ並心丸所

少モ大魁ト名ツクニギル所ヲバツホト云坪

頰ノ名也常ニ牛角ラニテ作ル是モ

數竹ヲ集ル束ル故ニ名クル也笙竹

ツハ等ト云吹所ノ差出ル所ヲハ嶽ト云  
形ヲ鳳凰ニ象シテ所ヲモ鳥此角ニ擬テ  
云也帝ニ握ル所ヲ管ト云ハ俗ノ云也  
本名ニ非ズ此大魁ノ義ヲ以テ人ヲ云  
ヲモアコタヲ着ル名トハ心得給ベシ  
同書卷十一 黃車 秀子 黃字ニシテリ

養電下暖曝南榮

東海道相摸國鎌倉郡戸塚驛富場

觀、恬宮いづみ國宇佐宮うすけ三所の大神を

勸誘いざなひ一つ年霜を經しと一

千と年の舊地敵國降伏武軍長久

舟中女禰と字護もる人靈神也三

所と中は應神天皇神功皇后玉依姬

年の子お合殿子案縣大明神

命の大權也亦別力けりの案嶋大

命の大權也亦別力けりの案嶋大

明神、比伊國石原の部、牧田の社、同神  
を奉る。本朝、醫宗の靈神。万病平癒、愈も  
げえと、りる。殊に、腹下の病を祈る者。  
其奇蹟、と書ぶ。と、鐵。最嶋、大明神  
い、安、國、宮、嶋、同、伴、の、神、福、福  
を、授、け、財、と、救、る。大、己、貴、命、は、  
遠、に、回、社、無、權、現、同、伴、の、靈、神、火、災  
を、防、護、す。と、揚、馬、ち、り、か、く、靈、神  
配、祀、の、宮、を、丹、誠、愈、祈、の、輩、必、災、禍

を、轉、して、幸、福、を、い、け、貧、乏、を、免、れ、と、  
富、貴、を、得、る、を、い、ふ。富、塚、ハ、幡、宮、と、傳、  
稱、す。ち、る。軍、の、名、と、い、ふ。塚、と、い、ふ。富、塚、  
を、磯、の、ち、り、と、い、ふ。し、ら、う、陵、谷、無、名、處、の、  
た、く、い、富、塚、年、ち、る、ち、り、富、塚、の、し、を、い、ふ。と、  
此、用、宮、を、い、再、建、の、時、子、孫、に、  
從、上、月、日、を、あ、げ、れ、い、く、上、社、司、大、殿、  
を、祭、し、偏、く、信、心、の、家、を、勸、進、し、  
所、人、御、社、を、修、め、い、ふ、多、か、を、か、り、し、



政教。拜殿。主社。外院。共に新築。土  
木の功を遂げ。落成。此日。丹誠  
懇心。を令し。永世。悠々。とす。御氣の  
家。門。御氣。を祈る。一。城。莫。く。大  
方の信家。靈社。御氣。を祈る。社  
司。の志。を。あつ。を。みる。と。あ。ら。ん。

富塚。信。神。主

文政十三年三月 神主 柴田大蔵



手継大明神縁起  
常陸國新治郡下林村。村上。山。觀  
音。寺。子。鎮座。せる。手継大明神。の。女  
神。の。子。本。地。の。善。賢。善。信。を。そ  
ありける。衆。諸。の。諸。人。男。女。縁。談  
の。成。ん。便。女。祈。り。縁。談。の。高。貴  
の。家。子。睦。む。ん。便。を。い。り。福。祿。を  
ば。ん。便。を。祈。り。惣。て。善。子。を  
ば。ん。便。の。子。を。祈。り。善。心。成。就

せびとりよとけ。又子の病の平  
愈せれる。靈験いみやうなり。  
如所の樂的次第をいささか  
みお川かんを急る。地大明神と  
ハチヤウのり。ハチヤウの  
野といふる現し。別當南  
照院新来り。今も。當  
山廿四世康哉阿闍梨。今の  
内の地と遷し。靈験

いよ。揚書。万人群衆し。祈請  
いふら。成就せむとす。  
そし。普賢大士の由來。大方廣  
佛華嚴經の旨譯の普賢菩薩  
行品。新譯の普賢行品。妙法蓮華  
經の普賢菩薩觀音品。觀音  
賢菩薩行法經。金剛壽經。普  
賢變等羅經。普賢菩薩陀  
羅尼經。理趣經。大樂金剛刺。

快書本願

並日賢軌。大日經疏。たゞよとてえり。廣  
大靈化の不思議かあり。かたむ。  
神の女神と。顯し。方人善家の  
手次地。一。よの。大利益のほどこ  
そ。た。と。し。し。

常陸國新治郡下林村

村上山觀音寺其世位持

沙門 辨 慧 謹 識

真偽可尋

按ウナルを字の義とし。ふ。さ。む。と。し  
靈ノウナル。紙先。鴨ノウナリ。な。む。ふ。皆  
同語。雄略紀の。こ。ノ。ウ。キ。と  
通。て。さ。こ。ふ。ウ。と。声。を。揚。さ。る。と  
ウ。ク。な。む。ウ。け。か。り。

倭漢三才圖會卷十八 樂器部子笙音  
生和名象乃布江。舊俗云之太。乾俗云。

皇保ツキト世本云隨

拈作者隨者

考之故曰匏

又云等小雲俱切世本云

今識者希

澆口戸

北廊

北門

拾芥抄中末宮城部ノ澆口戸ハ清涼殿北  
里ハ澆口戸西

雲高抄追備子備生平依子入花門ノ  
徑末庭出澆口戸侍臣於孫庇射之

同書臨時祭奉裏書子次舞人引出馬入澆  
口戸云又云次藏人頭昇御喚便以下其

路徑公卿後具行西於北廊下台召成  
由云北廊澆  
口戸のり

史記大綱

日中行事より下格子の後。殿上の名<sup>ナ</sup>給<sup>ト</sup>のりあり。  
 瓦人孫庇の南の端に尻をかき。殿上人に上の戸  
 の口。女位い壁のもし候に。滝口北の戸入り入  
 て糸庭より<sup>多</sup>。中<sup>中</sup>徳<sup>徳</sup>掛<sup>掛</sup>して。各名<sup>各</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>入。  
 滝口の戸よりすわ<sup>り</sup>して。同<sup>同</sup>籍<sup>籍</sup>の<sup>の</sup>先<sup>先</sup>進<sup>進</sup>教<sup>教</sup>し  
 て。此の陣よりくど<sup>り</sup>あ<sup>ら</sup>せ<sup>し</sup>き。  
 政事要略 廿九の巻十 追儀のありて。時方相  
 徑<sup>徑</sup>宣<sup>宣</sup>幸<sup>幸</sup> 名<sup>名</sup>我<sup>我</sup>景<sup>景</sup>門<sup>門</sup>自<sup>自</sup>北<sup>北</sup>廊<sup>廊</sup>東<sup>東</sup>へ<sup>出</sup>ッ  
 矣<sup>矣</sup>。

藝文類聚 四十の巻 笠<sup>笠</sup>子<sup>子</sup>釋<sup>釋</sup>名<sup>名</sup>曰<sup>曰</sup>笠<sup>笠</sup>生  
 也<sup>也</sup>家<sup>家</sup>物<sup>物</sup>也<sup>也</sup>

遂<sup>遂</sup>點<sup>點</sup>亮<sup>亮</sup>

杜氏通典 百四十四 笠<sup>笠</sup>子<sup>子</sup>笠<sup>笠</sup>世<sup>世</sup>本<sup>本</sup>云<sup>云</sup>隨<sup>隨</sup>作<sup>作</sup>

笠<sup>笠</sup>子<sup>子</sup>知<sup>知</sup>

笠<sup>笠</sup>子<sup>子</sup>知<sup>知</sup>

故曰匏○等子亦笙也

南史

文献通考

事林廣記

四卷音聲

從笙等子亦笙亦如

事物紀原

二卷音聲

笙等子禮記

女媧之所作也

又笙等子世本曰隨

世本之說是

事林廣記

四卷音聲

從笙等子笙乃女媧

所造

謂之做笙

按笙等子の説傳漢併書の所見は

かほれどさきを引出んもあつたわら

とてさるぬ

文獻通考四百卅樂考金之屬胡部上方響  
鐵響音梁有銅磬蓋今方響之類也方  
響以鐵為之脩寸廣二寸圓上方下架如  
磬而不設業倚於架上以代鐘磬石  
所用者纒之四寸周二樂載西涼清樂方  
響音加十六枚具黃鐘大呂二均聲唐  
武帝朝朱屋音太尉有樂史虜郊嘗  
攜琴瑟於池上彈瑟者謂忽罔菱荷間  
有物躍出其岸視之乃方響瑟者鐵也

豈指撥精妙能致律呂之然耶和凝  
有響鐵之歌蓋本諸此

○文獻通考四卷樂考乃金之屬胡部子銅鈸

銅鈸謂之銅盤也古西戎南蠻之器也  
昔晉人有銅深盤無故自鳴張茂先謂  
人曰此器洛陽宮鐘聲相諧宮中撞故  
鳴也後驗人臬爾大抵音比別和聲同則  
應非有物使之然也

○文獻通考百卷樂考乃匏之屬雅部子笙

巢笙 世本云隨作笙未審何代人禮記曰女  
媯之笙簧說文曰笙正月之音物生故謂  
笙十三簧象鳳之身列管匏中施簧管  
端宮管在中中央三十六簧曰笙宮管在旁  
十九簧曰笙十三簧曰笙其他皆相似也大笙謂之  
簧小笙謂之和詩傳云吹笙則簧鼓矣善笙  
中之簧也周禮春官大司樂笙師掌教飲  
笙十簧鄭衆云笙三十六簧笙十  
三簧飲之視矚也飲音吹爾雅曰笙十九簧  
曰巢十三簧曰和漢書十帝時零陵文舉子奚



景於舜祠得笙白玉管後代易之以竹耳  
釋名曰笙生也象物貫地而生竹母曰匏以為  
之故曰匏陳氏樂書曰萬物盈乎天地之間  
入手坎則革而趨新故其音革而為鼓成  
手艮則始作而施生故其音匏而為笙古  
者造笙以曲沃之匏汶陽之篠列管匏中  
而施簧管端則美在其中鐘而為宮也  
所以道達冲氣律用大簇立春之音也  
故有長短之制焉有六合之和焉故五經新

疑曰笙者法萬物始生道達陰陽之氣故有  
長短黃鐘為始法象鳳凰笙為樂器  
其形鳳翼其聲鳳鳴其長四尺大者十九  
簧謂之巢以衆管在匏有鳳巢之象也  
小者十二管謂之和以大者唱則小者和也  
儀禮有之三笙一和而成聲是也大射儀  
樂人宿縣于阼階東笙磬西面其南笙  
鐘蓋笙艮音也於方為陽鐘兌音也於  
方為陰周官笙師掌于教吹笙共其鐘笙

之樂以教補夏書曰笙鏞以間是鼓應笙之  
鐘而笙亦應之也。賦勝掌笙磬詩曰笙磬  
同音則磬乾音也。與笙同為陽聲是較于  
應笙之磬而笙亦應之也。笙磬則異器  
而同音笙鐘則異音而同樂。儀禮有衆笙  
之名而蕩在建鼓之間。孟衆笙所以備和  
奏洽百禮。少皞特應鐘磬而已哉。鹿鳴  
所謂鼓瑟鼓琴吹笙鼓簧應琴瑟之笙  
也。賓之初筵曰籥舞笙鼓應鼓之笙也。禮

弓孔子十日而成笙歌。儀禮歌魚麗笙由庚  
笙之類。應歌之笙也。然有笙之為用。豈不  
備哉。此帝舜用之所以鳳儀子音吹之所  
以鳳鳴也。記曰女媧之笙簧。世卒曰隨作笙  
簧。庸詎知隨非女媧氏之臣乎。黃帝制律以  
伶倫造鐘以管授。則女媧作笙。子以隨不之  
疑矣。朝李照作巢笙。今二十四聲以應  
律呂。正倍之聲。作和笙。應笙。子。今清濁之聲。  
又自制大笙。上之太樂。亦可謂之復古制矣。

今大常笙濁聲十二中聲十二清聲十二俗  
 呼為鳳笙蓋蜀王所進樂工不能吹雅  
 存而不用此者按清濁正三倍聲皆得相應  
 誠去心清聲吹之雅用之雅樂亦惡在其為不  
 可哉今常笙之制第一管頭子應鐘清聲第二管  
 正聲應頭子四管第四管南呂正聲五子五中呂管也射  
 正聲無心六六托管蕤賓濁聲七心托管七十五管大呂正聲無心  
 八大鐘管姑洗濁聲有應管五子內呂清聲九心管四管十中  
 音子黃鐘清聲十一心托管夾鐘正聲無心十四高聲管大  
 姑洗正聲應大鐘十三心托管夾鐘正聲無心十四高聲管大  
 蕤賓正聲十五平調子林鐘清聲十六平調管林鐘正聲十七  
 後韻太蕤濁聲應商聲十八義聲管夷則  
 正聲無應十九托管仲呂正聲無心八聲

○同書文獻通考卷一百一十樂考卷之九屬雅部和笙 鳳笙

陳氏樂書曰傳曰大笙者聲衆而高也小者音  
 相和也斯不然笙大小之辨乎說文曰笙正音  
 之音十二簧象鳳身蓋其簧十二以應十二  
 律也其一以象閏也宋朝登歌用和笙取  
 其大者倡則小者和非阮逸所謂其聲清  
 和也用十三簧非阮逸所謂十九簧也巢和若  
 均用十九簧何以辨小大之器哉阮逸謂子  
 笙起管四管為黃鐘巢笙起中音管為

黃鐘和笙起平調為黃鐘各十九音以黃有四  
清聲一濁聲十二正聲耳以編鐘四清聲考  
驗則和笙平調子是黃鐘清也也子笙管牙五  
子是太簇清也中呂管是大呂清也中音  
子是夾鐘清也既已謂之管矣謂之笙矣  
安得合而一之為管子笙邪儀禮所謂三笙和  
者不過四人相為倡和爾孰謂竹子和之類邪  
蔡邕月令章句曰季秋之月上丁入學習吹笙所以  
通氣也管笙爾笙管子皆  
以吹鳴者也

○同書文獻通考卷一百一樂考卷之九雅部大管

小管子管子亦笙也今之笙管子以木代匏而漆  
殊愈於匏制梁之南尚仍古制南齊書則是  
匏其形在陳氏樂書曰昔女媧氏役隨裁匏竹以為  
管子其形參差以象鳥羽其大類也火數二其  
成數則七焉冬之至吹黃鐘之律而間音以  
管子冬則冰玉而管子以之則冰器也冰數二其  
成數則六焉周大而方之則三十六者管子之  
管數也周七而方之則四十二者管子之長數

也。月令仲夏調笙。笙，淮南子謂孟夏吹笙。笙，蓋不知此。周笙師，管師教吹也。笙，則笙亦笙類也。以笙師教之，雖異器，同立皆立。春之氣也。樂記曰：聖人作為此鼓，鼓，柷，楬，塤，荒，然後為之鐘，磬，瑟，琴，以和之。是樂之倡始者在鼓。鼓，柷，楬，塤，荒，其所謂鐘，磬，瑟，琴，瑟也。特其和聲者而已。韓非子曰：瑟，琴，者，五聲之長也。琴，瑟，先則鐘，磬，皆隨也。琴，瑟，則諸音皆和。古之聖人制作之意哉。說文曰：笙，十管。

二十六簧。象，笙，以竹，于宮在中，故也。後世所存多二十三簧。具二均，聲，一為，宋朝，宋祁曾於樂府得古笙，十有管，而簧，列管，參差，及曲頸，皆為鳳飾。樂工皆以為無用之器。惟葉防歎，更造，使其清，正，倍三均之聲，是。不知去二變，四清，以合手聲，律之正也。通禮義，蔡曰：漢武帝，丘仲作笙，三十六簧，以五仲，作尺四寸之笛，遂誤以為笙。和。文獻通考，八百，樂考，竹之屬，胡部，感風案。

悲篥 篥管、頭管、風管 威角篥本名悲篥出  
 於胡中具聲年悲 或云傷者相傳胡人吹角以  
 陳氏鄉書曰威角篥一名悲篥亦一名加篥竟  
 胡龜茲之樂也以竹為管以蘆為首狀類  
 胡篳加而九竅所法者角音而其悲篥胡  
 人吹之以謔為中國馬焉

箏

倭名類聚抄卷四 管箏類部子箏風俗  
 通云竇作箏 先竟反和名 其形參差  
 象鳳羽也 一云箏類 一云箏 胡文  
 者編管而吹也 但其長短不同參差之義是  
 歛一云箏十六管今案數諸說不同上種通  
 義云大者二十三管小者十  
 三管一云箏所造十四管  
 同書天文卷四 音樂具部子箏 琴  
 箏月令章句云箏 音箏俗 編竹

吹之長則濁短則清以密端實其

底而增減則和也音箫玉篇云是局反竹品之氣又云笑胡交反小箫

也又名鳳箫又名雅箫又鳳管又云籟箫也箫之笛

風俗通云舜作箫虞舜也  
有虞氏其政參差以象鳳翼十管長

一尺云云十六管十或

按此說風俗通六の考もせしむれどあり

七の管

宣穂祭の便廿七子ほのし〜い  
女ほの七のたか〜んう〜  
そあけ〜あお〜おい〜  
〜う〜あま〜たのり〜  
同国はつり上の一十四子このあはあま  
のお〜あま〜あま〜あま〜  
〜あま〜あま〜あま〜  
〜あま〜あま〜あま〜





厚解

卷之六

明人鄭賢の古今人物編第一卷子宋胡一  
 桂の三皇論を載て云三皇之號昉於  
 周礼外史掌三皇丑帝之書而不指  
 其名其次則見於秦博士有天皇  
 地皇人皇之議秦去古未遠三皇之  
 稱或無幾焉云々

皇師等撰銀の東大寺大佛記文の古碑額  
 上宮は皇帝親なりの天皇の字引用一  
 宋の西隆の王明清の揮塵後録卷一子古之

尊稱曰皇帝皇帝曰自孝平天下始尊  
皇帝之尊窮極崇及越前代  
後雖有作亦在加尊高宗上元  
元年帝自稱曰天皇帝天皇帝  
晉書天文志上稱云鈞陳曰曰天皇帝  
帝中云

隋書天文志上稱云文皇帝曰內階天  
皇帝之階也



